

## 式亭三馬の趣向

大内, 保宏  
鎮西女子高等学校教諭

<https://doi.org/10.15017/10447>

---

出版情報 : 文献探究. 18, pp.44-49, 1986-09-18. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :

# 式亭三馬の趣向

大内保宏

はじめに

江戸後期の戯作文学は、他の作品を粉本として、その趣向なり形式なりを取り込んで発展してきたものが多い。例えば、

式亭三馬や十返舎一九は、既に考証される如く、八文字屋本、黄表紙、小咄本、狂言など、先行の作品を、今日からすれば、劇物として指弾さるべき程に用ゐてゐる。しかし当人達は、それらをもって、如何にもふさはしく、似つこらしく、自作の一隅を飾り得たかの、換骨奪胎の妙をほこつたのである。

とされる如くである（中村幸彦博士「戯作論」一七四頁）。

その場合、換骨奪胎のやり方——「構成に関する方法」たる「趣向」を、先行作品からどのように吸収し発展させているか——に、各作者の創作上の意図や特色を探る余地が有りそうに思われる。

ここでは、そうした観点から、黄表紙「人間一心観替縁」と滑稽本「人心観機関」（文化十一年刊）の両作品を中心に三馬の趣向を見、また一九のそれとの比較を試みたいと思う。

一、「人間一心観替縁」をめぐる

「人間一心観替縁」（二冊、歌川豊国画、西宮新六板）は、寛政六年刊。同年刊の「天道浮世出星換」（三冊、歌川豊国画、西宮新六板）と共に三馬の処女作として知られる。

【梗概】

神田の八丁堀に式田や馬二郎というのらくらな男がいた。ある日、馬二郎がぼうっとしてみると、かようかみの末社のいきちよん大通神があらわれ、腹明鏡を授ける。この眼鏡に目をあてると女郎遊びの様が見える。金でどうでもなると思っている大戻とその家庭、その他年季明け前の女郎など様々な人物の内幕が見える。そして、次には江戸ッ子の生まれる所などが見える。十丁目にいたりやめようとすると、通の心をおこせと大通神より馬二郎に渡されたのが本作のもとであった。

これは、芝全交の黄表紙「十四傾城腹之内」（三冊、北尾重政画、鶴屋喜右衛門板「か」、寛政五年刊）を粉本とするもので、既に滝沢馬琴に「近世物之本江戸作者部類」の「本町庵三馬」の項における指摘が有る。「——腹之内」の梗概は、次の通りである。

最初に、「真向成嘘言吐図」と「後向尻抱者誤図」というおいらんの前向きと後向きの図があり、相對照して表裏の関係になつてゐる。心の臓から、おいらんの表裏の有様がいくつもでてゐる。心の臓は、腹の中の親分で、肝の臓はその召使である。腎の臓が水が減つて病となる。腹の中にやん八という火が現れ、おいらんの不養

生もあって胆玉やぐいぐい虫と共にあばれまわる。おいらんのせいで内臓に異変が起こるが、肝の臓などの活躍によって、病の根はきられ、十四領域は無病息災となり、めでたく終わる。

両作品を比較してみると、日頃見なれないものをのぞく、ないし、ものの表裏をのぞくといった趣向が共通しており、登場人物にも、おいらんや女郎といった類似のものが見られる。但し、「腹之内」のそれがのぞきの面白さ一方で展開しているのに対し、「観替縁」のそれは、世態の人情を写すことや町人の「類型的描写」と言われるうがちの描写に重きを置いており、その辺りに同作品における三馬の関心が有ったらしいことが分かる。それは、やがて確立される三馬の作風——いわゆる町人の平面的類型描写、即ち当代にあつては巧緻な趣向による描写につながるものであろう。

また、そうした関心の違いがあればこそ、「観替縁」においては、内臓の擬人化といった「腹之内」のもう一つの趣向は生かされずにしまったものでもあろう。

ところで、「観替縁」と同様に「腹之内」を粉本として利用したものに、三馬の合巻「腹之内戯作種本」(三冊、小川美丸画、鶴屋喜右衛門板、文化八年刊)と一九の黄表紙「腹内養生主論」(三冊、一九画、西村与八板、寛政十一年刊)とが知られる。既に、山口剛氏によって「腹之内」との簡単な比較がなされているが、上記と対照する意味で、少し詳しく内容に触れながら考察してみたい。

#### 【「腹之内戯作種本」梗概】

裏表紙に「まつ序開に板元のはらの内をおめにかけます」と述べ、「はらの内はつたん」から始まる。末尾に、「文化八歳辛未新版目録」が有り、その中に、本作が「式亭三馬腹之内」として示されている。

板元が腹の内をみせ、作者や画工に文句をいう。草紙作りの内幕は、芝居に例えるなら太夫(作者)と三味線ひき(絵師)の呼吸が肝要なのと同じだ。作者の腹の内(楽屋)には、様々な登場人物がいる。三馬が机の前にすわっている。三馬の腹の内では、魂が総指揮をとっている。作者の魂がなまけているので、腹の内の役者もなまける。そして、役者同士けんかをする。養川師宣の領域絵が恋愛をする。敵役にたたかれるが、忠義者のしもべにすくわれる。しかし、三馬はのんびりしている。腹の内のものを筆耕の両として降らせ目をまわさせようとする。悪婆と丹前男との争いなどがあるが、竜宮のなんだ龍王と地獄の閻魔大王の和睦となり騒動がおさまる。三馬もようやく目がさめて机に向かうが今まで怠けていたので、多くの板元に来られて困る。腹の内もおさまって、だんだん新趣向も出てくる。

#### 【「腹内養生主論」梗概】

セ川丁辺に住む一九という怠け者が夢を見る。貝原篤信という医者が現れ、夢と共に口中に飛びこむ。一九が腹の中をのぞくと心の臓たちが口のせいで被害を蒙ったと責めている。脾の臓の息子の元気は、腎の臓の娘の精気を見そめる。元気と精気はやがて動当され、かけ落ちする。腹の内は大騒動となるが、胆の仲介で口はあまりの証文を書きおとなしくなる。そして、腹の内には平和がもどる。一九が夢からさめると、篤信が現れ、口を噛めさとして去る。養生を第一にして働けば金銀は自分の前にふってわくのだ。

一見して明らかになく、両作品とも、「観替縁」に比べてはるかに「腹之内」に近い趣向を持つものである。その事は、全般的な面のみならず一々の趣向を見てもいえることで、例えば、「種本」に見える三馬の魂から様々な場面が煙の如く出ている面(↓「腹之内

「に見える心の臓から、おいらんの表裏の有様がいくつもでている面（や、腹の内において騒動が起きる筋立て、『養生主論』における臓器の擬人化・心の臓の役割・腎の臓の病の経過・肺臓脾臓の病・肝臓と肝玉との関係・終段における諸病の全快といった筋立てなど全てそうである。

もちろん、後者には貝原益軒の『養生訓』や孫思邈の『千金方』などからの影響も認められるが、趣向の大方が『腹之内』のそれによるものであることは疑い得ない。

つまり、両作品とも、『観替縁』と同様に『腹之内』から趣向を借りているわけであるが、それぞれを比較してみると、三馬の『種本』がやはり役者やしもべ・悪婆・丹前男といった町人の類型・人情を描こうとしているのに対し、一九の『養生主論』は全く臓器のどたばたをのぞく面白さを売りものにしており、趣向の生かし方に明らかな色合いの違いが見られる。三馬が全交作品の延長線上に彼独自の世界を打ち出し得ているのに対して、一九の場合、医書の取り込みなどに関して全交作品にまさる点はあるものの、ほとんど則ち一步手前の趣きがあることも事実である。

## 二、『人心覗機関』をめぐる

次に、三馬作品とそれに関連する一九の作品とを比較する意味で、『<sup>養心</sup>人心覗機関』（二冊、歌川国直画、丁子屋平兵衛板）について考察してみたい。

同作品は、文化十一年刊の滑稽本で、同年刊・三馬作の『古今百馬鹿』など三種とともに滑稽本としては末期の作である。他の三種と同様、ものの「表裏」を描くという趣向を取っており、全編次のような題目の付された表裏一組の短話から成る。

○馬鹿はつくさぬといふ人の表、其裏

○高慢を吐く草沢医生の表、其裏

○見えぼう第一とする人の表、其裏

○料理を食自慢する人の表、其裏

○狼者と呼ぶ、下卑女房の表、其裏

即ち、徹底してさまざまな町人の腹の内をさぐるという内容であるが、これは、作品名からも分かる通り、三馬の処女作『観替縁』からの発展作である。

その成立を考えるには、『観替縁』『腹之内戯作種本』との関係や『古今百馬鹿』等三種との関係など説明すべき点が多いが、ここでは取り敢えず、論述の筋に沿って一九作品との関係に絞って見て行くことにする。

一九には『<sup>人心覗機関</sup>人心覗機関』、『<sup>両面摺</sup>両面摺』、『<sup>縁裏面行扶路次</sup>縁裏面行扶路次』<sup>（後編）</sup>が有って、いずれも『覗機関』の粉本と思われる（前者がそう見られることについては、既に重友毅氏が『近世文学論集』の中で簡単に触れておられる）。

『<sup>人心覗機関</sup>人心覗機関』（三冊、山口屋忠介板「か」、享和元年刊）は、全編次のような題目の付された表裏一組の短話から成る。

○名聞表、其裏

○遊の表、其裏

○りんきの表、其裏

○鏡面、かぐみの裏

○小判表、小判裏

○身代面、其うら

○嫁姑面、しうとの裏、よめの裏

○人体面、其裏

○名頭字の事

（巻之上）

（巻之下）

（上巻）

（中巻）

（下巻）

また、「<sup>後編裏</sup>面行技路次」(一冊、山口屋忠介板「か」、享和三年刊)は「人心両面摺」の後編であって、やはり、全編次のような題目の付された表裏一組の短話から成る。

○剛強表、其裏 (上巻)

○倡客表、其裏

○悟道表、其裏

○倡妓表、其裏 (中巻)

○愛着表、其裏

○下情表、其裏

○夫婦表、其裏

○書林表、其裏 (下巻)

人の心や行動の表裏を描こうとすることは戯作において珍しいことではないが、町人の類型やその生活に取材した類型を、紙面一丁ないし半丁に区切つて整然と、かつ対照的に「表裏」に書き分ける例は、あまり無いようである。

これら二作品と三馬の「<sup>悪胸</sup>機関」とを比較すると、そうした形式の類似のみならず、登場する人物・物等の内容の面でも相似た関係が認められる。

「<sup>両面摺</sup>」…通人・衣服・米櫃・葬式掃りの四五人連れ・嫉妬深い人・女房・遊女と客・みえの強い商人・貧乏神・嫁姑・金持ち、など

「<sup>技路次</sup>」…屈強な者とその女房・遊び人・婆様と和尚・息子とおいらん・父親と息子・我が子と父親と若い者・亭主と女房・本屋、など

「<sup>視機関</sup>」…遊び好きの町人と家族・医者と商家・みえの強い(商人)と使用人・料理好きだがうぬぼれ者の商人・女房と亭主と隣の女房、など

即ち、両作品が「<sup>視機関</sup>」の粉本であることは動かないと思われるのであるが、但し、その描写の姿勢について見れば、ここでも、一九作品には筋の起伏やオチが有る一方、登場人物の「生活臭」希薄な類型性が目立ち、三馬作品には起伏やオチは無いものの人物を眼前に髣髴とさせるような緻密な描写に富み、また心の「裏」にしてもかなり具体的に書かれていて、本田康雄氏のいわゆる浮世物真似の手法が取られているといった具合に、色合いの違いが見られる。やはり、三馬は、粉本の趣向を消化し、人物描写において彼独自の世界を打ち出し得ていると言つて良いように思う。

### 三、「<sup>早替胸機関</sup>」をめぐつて

「<sup>早替胸機関</sup>」(三巻一冊、歌川豊国画、西村源六、石渡利助、石渡平八板)は文化七年初刊の滑稽本である。改題本に、「<sup>善悪胸の機関</sup>」がある。本作は、「<sup>人心視機関</sup>」と兄弟的位置にある作品で、全編、次のような題目からなる短編の集合である。

- 美人変為<sup>鬚髯</sup> (びじんかへばいすげ)
  - 小二変為<sup>主骨</sup> (せうじかへしゅこつ)
  - <sup>麒麟</sup>変為<sup>驢馬</sup> (きりんかへろうば)
  - <sup>田博</sup>変為<sup>令室</sup> (たひろかへりやうむろ)
  - <sup>仏願</sup>変為<sup>鬼面</sup> (ぶつげんかへおにめん)
  - <sup>新婦</sup>変為<sup>姑婆</sup> (しんぷうかへこば)
  - <sup>虚弱</sup>変為<sup>剛強</sup> (きよじやくかへごうきやう)
  - <sup>褒美</sup>変為<sup>批評</sup> (ほうびかへひひう)
- ほめことば・わるくち
- 本作も「<sup>人心視機関</sup>」と同様、人の心の「裏」というものを覗くものであるが、三馬の作品を書く上での姿勢には若干異なるものがあるように思う。

『人心観替縁』では、その序に「人間の大概巧は」とあって、人間やこの世のなりわいを一つのからくりじかけ——箱眼鏡の中で順次面が変わっていくような——に見立て、その中身（裏）を見せて、暴露することに重点があった。たしかに、本作でも、巻頭のvariety絵に見るように、あるものが次から次に、或るいはたちまちに違うものへ変化するというような、「早変わり」のおもしろさをも追求している。

しかし、重点は、「忽変る浮世の光景」。「きのふは昔けふははや」「月令にもし早替。物換り星移りて」などとあるように、「表裏」の捉え方を一歩押し進め、年月による人の変化、立場の変化、それによる心の変化ということを描くところにあるのである。

例えば、或る人が他人の悪口を言っている、その人と同じ立場に立った時には、結局同じ事をするようになるといった具合で、ある状態からある状態への移行、つまり変化ということを通して、浮世の内幕ないし真実（裏）をみせようとしているのである。

なお、本作には、本自体を切ったり貼り付けたりの、いわゆる本の仕掛けも新奇な趣向の一部として見られる。

### まとめに——三馬における趣向の消化——

三馬の処女作の黄表紙『人間一心観替縁』が寛政六年に世に出てから、二十一年後の文化十一年に滑稽本『人心観機関』が刊行される。以上に見て来たように、前者は、芝全交の黄表紙の『十四傾城腹之内』を粉本とし、腹の内をのぞくという趣向と人の心の裏をあばくという趣向を取り入れ、それに三馬の文字の特徴の一つともいえる町人の類型を描くという新趣向を重ねたものであった。単に全交作品の趣向を多く取り入れたもので外観の上からも近い作品ならば、『腹之内戯作種本』（文化八年刊）がある。同作は趣向を自分の作品に生かす技巧（ふくらませ方等）がずっと巧妙だし、さし画の構図などにも進歩が見ら

れて、たしかに『人間一心観替縁』との間には歳月を感じさせるものがあつた。ただ、趣向の取り込み方の基本的な姿勢は、『観替縁』の場合と同様で、方法的にも多少の差はあるにしても似通っていた。つまり、作品の基本的趣向は粉本から取り込んでも、その取り込み方において三馬は、それを作品の骨格としてすっかり寄りかかっていくのではなく、自己の独特の趣向を加えて作品全体の趣向とする方法を取っていた。

このことは、同じ全交作品を粉本とした十返舎一九の『腹内養生主論』（寛政十一年刊）等との大きな違いである。一九は、こまごまとした点まで剽窃に近い位に全交作品の趣向をそのままに利用しており、『腹之内戯作種本』以上に全交作品に近い内容のものとなっている。また、三馬のように自分の趣向を内側から加えていくのではなく、外側から加えて——即ち、素材を補い詳細化して彼の作品を作っていた。

『人間一心観替縁』という作品は、趣向の直接的な交渉という点では『腹之内戯作種本』さらには一九の『腹内養生主論』に譲るにしても、作品形成の三馬らしさという点では勝つていよう。つまり、町人の類型を数多く書き、世俗の人情の穿ちとでもいふべき精密描写を行なうということや、また、話の流れがいわゆる平面的でとりとめがない位に無碍であるということが顕著に認められるのである。

次に、『人心観機関』は、作品名が示す通り、『人間一心観替縁』の発展作であろうが、一九作の黄表紙『人心両面摺』（享和元年刊）、『裏面行抜路次』（享和三年刊）が、粉本となっていた。三馬の作品と一九の作品とは、いろいろな標題を決めてその「表」と「裏」を書くという形式が同じで、又、内容もよく似ているようであるが、実は、それぞれの作品に作者の性格が出ていて異なっている。作品の視点が異なるのである。

町人の類型を描き、人物だけでなくその生活全体を描くという題材の多彩さという点では、確かに一九の方が上だが、より精密に生き生きと町人を描くという点では三馬の方が勝るだろう。それは、滑稽本と黄表紙という違いを考

えてもである。

そこでも、「人間一心観普縁」の場合と同様に、粉本の趣向を根幹に配し、それに三馬独自のものを内面から加えていく方法をとっている。

最後に、「人心観機関」に関しては、三馬が、全交の「十四傾城腹之内」の人間の内幕を見るところという趣向に興味をいだいたことがうかがわれた。三馬は、読者の身近にいるような種類の人間をとりあげてその中味を暴露した。同じ全交作品を粉本として利用した一九の作品がドタバタや医書の引用に終始したのに比べ、三馬は町人という人間そのものに興味を持ち、それをできるだけ忠実に表現しようとしたのであった。そして、「人心観普縁」においても、彼の興味は多少他へ移ったかもしれないが、「—観普縁」の趣向をより発展させ、人の腹の内をのぞく、人の心の裏を書く、町人の類型を書くという趣向は残しながら、もっと対象に接近し、しかも詳細に描写を試みた。そして、彼は、「—観機関」からいくつもの派生作を世の中に出していった。やはりここでも三馬は、基になる作品の趣向を利用しつつ独自の新たな趣向をそれに加えて作品を作っていくというやり方を取っていた。

こうやってみていくと、戯作における趣向というものは、従来からいわれるような剽窃とか亜流とかで片付けられるようなものではなく、より細かく見ていくことにより作者ごとの作品づくりの有り方がうかがえて、興味深いのである。

— 鎮西女子高等学校教諭 —

へら頁より続く。備善誼主人三木居奇著)では、平賀源四の遺文集「飛花落葉」をちようど三年前再板させた銀鷄は、やはり源内と引合され、罵詈雑言を浴びせられている。「既に酒屋の丁稚までが覺て居る実語教のはちのにも、筆と筆との同じきハしるしてあしることを、「寡聞固陋の護」とされる、などなど。しかし、これだけ手を焼かれた銀鷄だが、生涯遂に正誤のくせを直さなかつたらしい。安政二年の江戸大地震の際、罹災地を廻つて取材した見聞録「時雨追袖後編」(外題「安政見聞別巻」は、「梓に上せん腹工なりしが、故有て心ざしを遂されハ、止事を得ず写本にて世に弘む」ことにした銀鷄の晚年作で、現在東京国立博物館の所蔵である。凡例に、著者の修正・校正にあつたの気苦労、苛立っている姿をうまいぐあいには彷彿させる一条があり、後者の此正を恐れながら以下に翻字するものとしたい。へら名・漢字体は原文の通り)。

— 奥山四研<sup>注</sup>といへる儒家の弟子に、佐々木某なる者あり。此人頗書を能し、又誹諧を好みて、宜葵が門に遊ぶ。家貧にして、何事も心に任せざる餘り、余が平亭を訪ひて、筆工をせんことを丐ふ。幸百四五十丁許の物ありけれハ、是き出して頼ミけるに、大いに歡び持かへりしが、四日目に出来せりとて持参せり。早々開いて是を見るに、其書ハ如何にも見事なれども、誤字夥敷、かな、てにきは、の違ひ最澤なりけるゆゑ、原書に引合して其意を俞しける処、此人大いに不満の体にて云けるやう、原書に真にて書たるを單に直し、へら頁(続く)